

[021] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10248>

出版情報：語文研究. 21, 1966-02-28. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

◇学会集報

昭和40年度第二学期

▼講義題目

- (大学院) 国語学演習(国語の変遷) 福田 教授
- (大学院) 演習(万葉集卷十九) 全
- (大学院) 講義(国語学概論) 全
- (全) 演習(天草本伊曾保) 春日助教
- (学部) 演習(宝物集) 全
- (全) 講義(国語史) 全
- (大学院) 臨時講義(方言学) 平山 講師
- (大学院) 国文学特研(書誌学の方法) 中村 教授
- (全) 演習(近世歌論書) 全
- (大学院) 講義(近世小説史) 全
- (学部) 演習(近松浄瑠璃) 全
- (大学院) 演習(江吏部集) 今井助教
- (大学院) 特講(源氏物語研究) 全
- (学部) 講読(枕草子) 全
- (全) 特講(近代文学) 重松助教

▼西日本国語国文学会

昭和40年9月18・19日 於 佐賀大学
研究発表(本会会員の分のみ)
支考の其角評をめぐって 石川 八朗

芭蕉の切字「や」について
田中 道雄
仮名「ん」による表記の意味するもの
鶴 久

ム及びモを表はす

露伴文学における華嚴思想
瀬里 広明

興昌寺一夜庵筆海帖と日向佐土原の文事
田尻 竜正

「つれづれ」の意味の再検討
井手 恒雄

柳里恭の誠の説
中村 幸彦

▼全国大学国語国文学会

昭和40年10月26・27日
於 九州大学文学部

公開講演会

古代語の国語史的意義
福田 良輔

研究発表会

鷗外と現代思想
重松 泰雄

「今昔」考
春日 和男

資料展観「在九州古活字版本展」

▼新入会員歓迎会

昭和40年11月14日
本年度進入生十二名を迎え、大野山文学散歩、太宰府飛梅会館にて歓迎会。

▼卒業論文構想発表会 昭和40年11月20日 於 文学部会議室

▼会員消息

○本会顧問小島吉雄先生は、此度の日本学術会議第七期会員選挙に御当選なさいましたのでお知らせいたします。

○笹淵友一氏は昨年九月渡米、一年の予定でミシガン大学にて日本文学を講ぜられています。

(二十頁よりつづく)

人文研究(大阪市立大学) 16巻5、文学・語学37、国語国文研究(北海道大学)31・32人文論集(静岡大学)15、徳島大学学芸紀要14巻、薩摩路(鹿児島大学)10、国文学研究(早稲田大学)32樟蔭国文学(大阪樟蔭女子大学)3、文学研究(日本文学研究会)22、日本文学(東京女子大学)25、日本文学(立教大学)15、教室(大分大学)9、駒沢国文4、国語国文学報(愛知学芸大学)19、古代文学5、実践文学26、学大国文(大阪学芸大学)1、剣と文8・10、国語国文学研究(熊本大学)1

○第二十二号原稿募集

昭和四十一年四月三十日まで
四百字詰原稿用紙三十枚程度

編集後記

本学年度も漸く大詰めに近い近づきつつあるが、無事第二十一号の編集を終えたことを悦ぶ。思えば、本年度は終戦後二十周年、開講以来まさに四十周年を閲したことになる。本誌第四・五号が開講三十周年記念特輯と謳ったことを思い出すが、今度は故あって、特別な編輯を試みなかった。ともあれ、歳月の早さに驚きつつも、うたた感無量なるを禁じ得ない。

所収論文で、清田氏(昭三九学部卒)の「古今六帖と千載佳句」、竜頭氏(昭四〇学部卒)の「和泉式部「くらきより」の歌の詠作年時」は、共に卒業論文の抜粋であり、田中氏の「蝶夢」、瀬里氏の「露伴」の二論は、共に日頃研鑽の一端である。とはいえ、中には問題点や討議の余地を残すものもあることと思う。大方の忌憚なきご批判を得れば、それぞれに、幸いなことであろう。福田教授の大作「奈良時代東国方言の研究」に対して、森山氏が書評のトップを切られたのも、当然のことながら有意義であった。ご多用中を寄稿いただいた五氏にお礼を申し上げます。

昨秋は、全国大学国語国文学会の開催を受け持ち、皆様から、各方面にわたって一方ならぬご援助をいただいた。お蔭をもって感況裡に大過なく終了できて何よりであった。ここに本欄を拝借して深く感謝を捧げるものである。(春日和男)

二 諸説あって一定していない。

三 川口久雄氏『平安朝日本漢文学史の研究』による。

四 『平安時代文学と白氏六帖』第四章第六節「千載佳句成立の年代」

五 『平安時代日本漢文学史の研究』第十六章第二節「大江維時と日観集、千載佳句」

六 内閣文庫乙本・松平文庫本は「三月イ三日」とあり、上野図書館本は「三月三日」とある。内閣文庫甲本は「三日」とあるのみである。

七 内閣文庫乙本は「八月イ十五夜」、上野図書館本は「八月十五夜」内閣文庫甲本と松平文庫本は「十五夜」となっている。

八 古今六帖細部下の数字は各部に於ける順序を示す。千載佳句細部下の数字も同様である。

九 平井卓郎氏（注一）に同じ。

一〇 山路平四郎氏「古今和歌集の部立について」 文学 昭和二十二年三月

小沢正夫氏「勅撰集の部立の研究」 国語と国文学 昭和十六年四月

福田良輔先生「古今集和歌の一排列基準としての美意識」台湾 昭和十五年六月

一一 古今六帖の編纂時代が諸説ある中で最も時代の新しい山田孝雄氏の説を極限と考えて仕事を進めたものである。「古今六帖覚書」日本大学国文学誌 語文 才一輯

一二 寛文九年板本による。山本明清の標註本と石塚龍磨の校証古今和歌六帖によると、契沖本によって「火」かにはさくら」は補ってある。

一三 『平安朝日本漢文学史の研究』 才十六章才二節「大江維時と日観集千載佳句」

▼受贈図書 昭和40年6月〜12月

正岡子規

地球儀・天球儀 二

徳川家康公伝

近世文芸資料と考証 IV

近代文学選

国立国語研究所年報（三十八年度）

共通語化の過程

類義語の研究

近代文学と仙台 一

奈良時代東国方言の研究

日本文学の自然観照

保険百歌

天地のはじめ 二

和漢古書分類法

連愚腰折集

創立三十年記念論文集（文理篇）

逐次刊行物目録（37年度）

〔抜刷〕

「おあんはなし」とその言語

おあんはなし

天理図書館

天理図書館

日光東照宮社務所

七人社

学友社

国立国語研究所

国立国語研究所

国立国語研究所

日曜随草社

福田良輔

瀬古 確

伊吹 高吉

前園 直健

長沢規矩也

宮本 八郎

福岡大学

国立国会図書館

吉野 忠

吉野 忠

吉野 忠

364 移ろはでしばし信太の森をみよかへりもぞする萬の裏風

返し

365 秋風はすこくふくともくずの葉のうらみがほには見えじとぞ思ふ

注2

160 物へ行く道にははらやに火屋といふものを造るを見て帰れてその夜云々
161 又人の葬送するを見て

世の中騒しきころ語ふ人の久しく音せぬに

184 世の中はいかになりゆくものとしてか心のどかに音づれもせぬ

注3

いさらゑする事ありて男(道貞)の家を去るとて常にする枕に書
きつくる

200 かはり居む塵ばかりだにしのばじな荒れたる床の枕見るとも

つらき心ありし人(道貞)の田舎より来て音もせぬ

201 来たたりとも言はぬぞつらきあるものと思はばこそ身をば恨みむ

津の国より人(道貞)の言ひおこせたる

242 忘草つむ人ありと聞きしかば見にだにも見ずすみよしの岸

返し

243 忘草つむほどとこそ思ひつれおぼつかなくて程のへつれば

注4

こころうきを見る見るたのむはわが心にもあらぬにやといふ男(道
貞)に

661 われもわれ心もしらぬものなればいかがつひにはなるとこそ見ぬ

陸奥国へいひやる

850 高かりし浪によそへてその国にありてふ山をいかにみるらむ

▼受贈雑誌 昭和40年6月〜12月

- 国語と国文学 7〜12月、国語国文 6〜12月、国文学解釈と鑑賞
7〜12月、国文学解釈と教材の研究 7〜12月、文学 7〜12月、
国学院雑誌 6〜10月、学苑 7〜12月、文献ジャーナル 7〜11月
八雲 7〜12月、白路 6〜12月、日米フォーラム 7〜11月、肇国
7〜10・12月、日本文学(日本文学協会) 6月、解釈 4〜8月
成城文芸 39、人文論究(北海道学芸大学函館人文学会) 25、女
子大國文(京都女子大学) 37〜39、書陵部紀要 16、人文研究所
報(神奈川大学) 1、人文研究(神奈川大学) 30、人文学報(東
京都立大学) 45、国文学攷(広島大学) 36〜38、立命館文学
232〜243、論究日本文学(立命館大学) 25、日本文学誌要(法政
大学) 12・13、法政大学文学部紀要 10、文学論集(佐賀大学)
6、大阪府立大学紀要 13卷 3、国文学漢文学論叢(東京教育大
学) 3、言語と文芸(東京教育大学) 40〜42、岐阜大学研究報
告 13、国文(お茶の水女子大学) 23、文芸研究(東北大学) 50
国語学研究(東北大学) 5、文学論藻(東洋大学) 31・32、音
声学会会報 119、平安朝文学研究 2卷 1、跡見学園国語科紀要 13
語文(日本大学) 21・22、金沢大学教育学部紀要 13、国語研究室
(東京大学) 4、名古屋大学文学部研究論集 27、静岡女子短大
研究紀要 11、文車(大阪大学大学院) 13・14、太宰研究 7・8
文芸と批評 8・9、万葉 56・57、中世文芸 32・33、国文目白(日
本女子大学) 4・5、相模女子大学紀要 20・21、連歌俳諧研
究 28、愛媛大学紀要 10卷、文芸研究(明治大学) 13、山口大学
文学会誌 16卷 1、田唄研究 8、国文学(関西大学) 38、能楽思
潮 32・33、国語学 61・62、(以下五十五頁へつづく)